

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 729 号] 2023 年 3 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.729

March 2023

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## エジプト見聞記

加藤 剛男 (団員)

2023 年 1 月 12 日～2 月 1 日、私はエジプトへ行ってきました。滞在の目的は、国際協力機関で働く私の息子の、小学 1 年になる次男を父親の赴任先エジプトへ連れて行くこと、さらに、中学 3 年の長男の学期が終わるのを待って、母親があとから一緒に合流する 3 月下旬までの間、父親と二人だけの生活になる孫のエジプトでの生活立ち上げ期のケアを私がする、という目的のためでした。

エジプト滞在 20 日間に体験したことを記したいと思います。

### I エミレーツ航空

関西空港からエミレーツ航空でドバイ経由、エジプトのカイロへ向かいました。エミレーツ航空は、アラブ首長国連邦のドバイを本拠とする航空会社で、航空業界で最新かつ効率性と快適さを備えた航空機を運行し、多様な文化的背景をもち、従業員は大陸のすべてで受賞歴を誇るサービスを提供しています。エコノミークラスで行きましたが、ビジネスクラスとの中間を行くゆったりとしたシートで、15 時間のフライトでしたが、あまり疲れませんでした。

### II ドバイ

10 時間 45 分のフライトでドバイへ着きました。早朝であったこともあり、気温は 17 度。空港は静かでアナウンスがありません。「快適で静かに」をモットーとしているからでしょう。

### III ドバイからカイロ

4 時間の飛行、機内泊 1 泊を経て、1 月 13 日にカイロのホテル (宿泊地) へ着きました。ホテル 17 階の住

まいからは真下に世界最長 6500 キロのナイル河が滔々と流れ、右手奥と左手奥にはピラミッドが見えます。夕日は砂漠の奥の地平線に赤々と沈み、まさに雄大で絶景でした。首都カイロには市内移動用の地下鉄は 3 本しか走っていません。従って移動は基本的に車です。それに道路は英国式のラウンドアバウトを活用した形式でどこを走っても信号がありません。運転技術は皆、実にうまいです。しょっちゅう前に車が入り込んできます。日本人がカイロで運転するには、かなりの勇気がいります。

### IV 物価の比較

翌日からの食材を買いに近くのスーパーへ行き、野菜、フルーツ、お米等を買いましたが、日本の物価の約半額で買えました。しかしながら、ウクライナ危機発生後、急激にインフレが昂進し、また現地通貨安も発生。生活物資として欧州等からの輸入品が流入する現地では、一般消費者層の生活が苦しくなっていると耳にします。

### V カイロ旧市街を見学

イエスさまが宿泊したとされる宿の上に立つコプト教会 (エジプトの原始キリスト教) を見学。カイロ大学の日本語学科および大阪の大学の夏期研修で学ばれたエジプト人ガイドさんの案内で、アブセルガ教会、エルムアルマロカ教会、マルゲルギス教会を見学。どの教会も威厳のある壮大なもので、天井が高く、窓には美しいステンドグラス、壁にはイコン絵が飾ってありました。途中ガイドさんと一緒に、イエスさまがヨセフさんとマリヤさんの 3 人で、ヘロデ王を逃れてエジプトまで来たと言われる道を見学しました。

### VI 学校の対応

孫を迎えに、住まいのホテル前にインターナショナルスクールの車が、朝 7 時 15 分に来てくれ、また午後 3 時にホテル前に送ってきてくれます。アフタースクールがある時は、4 時 15 分に送ってきてくれます。ありがたいことです。パキスタンの時は、学校まで行き帰りの送り迎えをしなければなりません。孫は



■筆者とお孫さん (善くん) (本人提供)

### 月報 2023 年 3 月号 CONTENTS

- ・ピンクのマフラー (大村恵美子) p. 2、公演予告 p. 3
- ・バッハ・カンタータの場「昇天節オラトリオ」 p. 3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [25] (大野博人) p. 4

エジプトの学校は楽しいと言っています。

### VII エジプト考古学博物館

世界中のどの博物館よりも多岐にわたる包括的な古代エジプトの遺品を収蔵展示しています。2階には「黄金マスクのツタンカーメン」など、豪華で優美な息を飲むような宝飾品の数々が展示されています。

### VIII ピラミッド

エジプトには130を超えるピラミッドがあると聞いた時には、大変びっくりしました。中でも最大の「クフ王」のピラミッドの中に入りました。世界一巨大な建造物で、高さは146メートル。構造物の容量としては、ローマのサンピエトロ大聖堂、ロンドンのセントポール大聖堂やウェストミンスター寺院、またフィレンツェとミラノの大聖堂がその中に収まる巨大なものでした。鉄の鎖のようなものを伝って内部の急階段を上までのぼりました。当時の王は巨大な権力を持っていたものだと、驚嘆しました。このピラミッドは、約10万人の労働者たちが休むことなく働き続けた結果、20年で完成したと言われていました。

### IX 鳥料理

郊外の鳥料理屋さんで、息子の知り合いのテレビレポーターの方と一緒に、鳥料理を堪能しました。デザートのプロデュースは抜群でした。息子いわく、「母がいつも作ってくれる片栗粉とミルクの温かい甘いおやつと同じ。ミルクのパンがゆの“オマール”というデザートしかり。母はエジプト料理を自作で作っていたのですね」。なお、エジプトはイスラム教国ですので肉でも豚肉は食べません。

### X アレクサンドリアの旅

1泊2日でアレクサンドリアの旅をしてきました。エジプト第2の都市で、アレクサンダー大王が建設した由緒ある港町です。中東における最も重要なサマーリゾートの一つで、地中海沿岸、ナイル河のデルタ地帯の北西に位置しています。港を守るような形で入江にあるフェロス島には、「世界の七不思議」の一つに数えられた有名な灯台が建っています。高さ120メートルあり、その頂点で燃える松明の火は、鏡で反射されて100マイル（185キロ）先からも見ることができると言われています。カイロからの距離は約220キロで、特急で約3時間かかります。車内の座席は新幹線のグリーン車並みの広さで快適でした。アレクサンドリアでは、国立博物館、カタコンベ（地下の墓所）、ポンペイの柱を見学しました。エジプト人のガイドさんの案内は行き届いていました。古代エジプト文化の大きさを味わいました。もともとおもにヘブライ語で記された旧約聖書は、古代のアレクサンドリアにおいて初めてギリシャ語に翻訳されたと言われています。昼食は、海辺のレストランで「10種類のシーフード料理」を堪能しました。

### XI カイロ・オペラハウスでのバレエ

カイロ・オペラハウスでバレエを観ました。演目は

## ピンクのマフラー

大村 恵美子（主宰者）

「そのマフラー、可愛い」と、外出中、見知らぬ中年男性から声をかけられることが何度かありました。団員の皆さんから去年の私の誕生日（3月9日）にいただいたプレゼントの、ピンクのレース様のマフラーです。柔らかく、長くて蝶結びにもできるものです。受けとった時に私は、まるで若々しい乙女が身につけるような色に見えて、とまどったのですが、意外なことに、好評なので、そのことをお伝えして、選んでくださった皆様に、あらためて心より御礼申しあげます。

そのマフラーに応じて、私自身も、かた苦しい表情ではなく、解放的な、やさしそうな顔ですごしてゆきたいものです。



■早春・紅梅（千葉光雄・撮影）

ビゼーの「カルメン」で、前半はストーリーをコンパクトにまとめたものであり、後半はスペインタンゴの激しいダンスでした。オペラハウスは壮大で、日本からの援助で建てられたものです。

### XII 大エジプト博物館でのコンサート

息子が勤務する機関からの借財で建設中の「大エジプト博物館」でコンサートがありました。完成すれば、単一文明の博物館としては世界最大の規模となります。エジプト出身のソプラノ歌手（Fatima Saidさん。ミラノやドイツで研鑽を受け、ドイツで活躍中のエジプト第一人者だそうです）の、よく透った美しい声の演奏でした。

\* \* \*

わずか20日間の滞在でしたが、エジプトは壮大で、歴史があり、聖書にまつわる都市が数多くありました。また、発展した主要都市（カイロ、ギザ、メンフィス、ベニ、ハッサン、アレクサンドリア等）は、ほとんどがナイル河沿岸に位置しています。まさにナイルの恩恵で栄えた国です。エジプト文明の最大の源は、ナイルと太陽でした。氾濫が肥沃な土地を生み出し、繁栄を授け、取り巻く砂漠により外敵から守られてきたのでした。まさに壮大な文明を感じました。80年の生涯の中でも貴重な体験でした。拙い見聞を記すことができた機会を感謝いたします。

## バッハ・カンタータの情景 №15

大村 健二 (団員)

### ■昇天節オラトリオ《頌めよ 神のみ国》

HIMMELFAHRTS-ORATORIUM BWV11

当公演のチラシにも触れましたが (<演奏作品へのご案内>)、礼拝のなかでのバッハ・カンタータの役割は、その日の説教の内容を、親しみやすく分かりやすく、目に見えるような具体的な驚きと感動へと導くことにありました。各カンタータの主題となる福音書の記事を思い浮かべながら、バッハの作曲意図に身をゆだねる——、バッハ・カンタータ鑑賞の醍醐味です。

今回定演の演目3曲を「昇天祭への道程——受難・復活の予告から、天への別れまで」とくくって話を進めてきて、いよいよステージの大団円にいたります。

イエスは自らの使命を果たすべく、弟子たちを連れて都エルサレムへの道を進みます。途上において、また受難の前夜にいたっても、弟子たちは待ちうける出来事を知る由もありません。イエスが「いなくなる」とはどういうことか、み言葉を悟れない不安と絶望、救いの懇願、かすかな希望への期待、ここまでの2曲は、おもに弟子たちの心理を主題として進められてきました。月報バックナンバー、BWV 12…2022年10月

[教会暦] 昇天節 [復活節後40日目(木)] (他に BWV 37、43、128)  
 [使徒書] 使徒言行録 1, 1-11 (イエスの最後の約束、昇天)  
 [福音書] マルコ 16, 14-20 (洗礼への派遣、昇天)  
 [成立] 初演 1735年5月19日 (昇天節) [旧全集では「カンタータ」、BCでは「受難曲とオラトリオ」に分類]  
 [歌詞] 台本作者不詳。ルカ 24, 50-52、行伝 1, 9-19、マルコ 16, 19。ただしテキストはブーゲンハーゲン「調和福音書」に基づく  
 [コラール] 第6曲) J. リスト Johann Rist 「いのちの主イエスは」 Du Lebensfürst, Herr Jesu Christ (1641) [BCH-28] 第4節。第9曲) G. W. ザーツェル Gottfried Wilhelm Sacer 「み空に昇りゆく」 Gott führet auf gen Himmel (1671, 1697?) [BCH-45] 第7節  
 [上演用訳詞] 大村恵美子 <http://bachsmusik.starfree.jp/bwv011.htm>  
 [編成] 独唱 SATB、合唱、トランペット3、ティンパニ、フルート2、オーボエ2、弦合奏、通奏低音

[楽曲構成 (NBA)]	冒頭句 (原詞/訳詞)	編成(略語)/調
1. 合唱	Lobet Gott in seinen Reichen 頌めよ 神のみ国	tp3,tim,fltr2,ob2,str, bc, 二長調、2/4
2. レチターティーヴォ(T) <福音史家>	Der Herr Jesus hub seine Hände auf イエス もろ手を上げて	bc
3. レチターティーヴォ(B)	Ach, Jesu, ist dein Abschied schon so nah? ああ イエス 早や去りたもうや?	fltr2, bc
4. アリア(A)	Ach, bleibe doch, mein liebstes Leben 留まりませ いとしき命	vn ユニゾン、bc イ短調、4/4
5. レチターティーヴォ(T) <福音史家>	Und ward aufgehoben zusehends 見守るうち 主は 天に挙(あ)げらる	bc
6. コラール	Nun lieget alles unter dir 今こそものみな 主のもとに在り	fltr2,ob2,str, bc, 二長調、3/4
7a. レチターティーヴォ (T/B) <福音史家>	Und da sie ihm nachsahen gen Himmel fahren 子ら 主の昇りゆくを仰ぐ	bc
b. レチターティーヴォ(A)	Ach ja! so komme bald zurück: とく帰りたまえ、歎けるわがもとに	fltr2, bc
c. レチターティーヴォ(T) <福音史家>	Sie aber beteten ihn an かれら主を崇め	bc
8. アリア(S)	Jesu, deine Gnadenblicke 主よ なが恵みの眼差し	fltr2,ob, str ト長 6 調、3/8
9. コラール	Wenn soll es doch geschehen そは いつならんや?	tp3,tim,fltr2,ob2,str, bc, 二長調、6/4 (演奏時間 26分)

[上演履歴] 1965 (#7)、1978 (#42)、2023 (#122) 予定  
 [日本語版楽譜発行] 2022年、ISBN 978-4-925234-88-7 (¥2300)

## — 第 122 回定期演奏会 —

[日時] 2023年5月6日 (土) 14:00 開演

[会場] 川口リリア音楽ホール

### カンタータ第12番《泣き 歎き 憂い 迷い》 カンタータ第22番《イエス 十二弟子呼びて言いたもう》 昇天節オラトリオ《頌めよ 神のみ国》 BWV 11

光野孝子(S)、谷地岬晶子(A)、鳥海寮(T)、小藤洋平(B)  
 管弦楽: A R S (コレギウム・アルモニア・スペリオレ・ジヤパン)  
 オルガン: 田尻明葉、合唱: 東京バッハ合唱団  
 指揮: 大村恵美子

チケット発売中: 全席自由 3500円 (当日売り 4000円)

#### <リリア音楽ホールについて>

会場は、舞台に大オルガンをもつ 600席のクラシック音楽専用ホール、音響には定評があります。木の壁面が落ち着きをあたえ、都心からのアクセスも良好(東京駅/新宿駅からJRで約25分など、川口駅下車、目の前)。

#### <後援会員の皆さまへ、招待状を同封>

後援会員の皆さまには、月報3月号(当号)に同封して「招待状」をお送りしました。コロナ禍「解禁」の初の公演です。ぜひともご来聴いただき、お励ましを頂きますようお願いいたします。

号 No. 724、BWV 22…同11月号 No. 725 と本年2月号 No. 728 に掲載 (前ページ脚部の URL から参照できます)。

さて、彼らは定められた道程を歩み終えました。ようやく《昇天節オラトリオ》の開幕です。《クリスマス・オラトリオ》と同じく物語音楽ですから、作品中のエヴァンゲリスト(福音史家)の語り(第2曲、5曲、7曲。曲番は NBA に拠る)が筋の展開を説明します(左掲の作品データ欄参照。歌詞対訳は当ページ脚部 URL から)。

この出来事を記念して制定されたものが「昇天祭」であり、ローマ・カトリック教会では、復活祭から40日後の木曜日と定められています(今年は5月18日)。日本のプロテスタント教会では祭日に数えられておらず、馴染みが薄いようですが、バッハの祖国ドイツでは今でも全域で祝日とされ、聖霊降臨祭と合わせて「美わしの五月」の最高の季節を迎えます。

天への別れの悲しみを歌う前半の圧巻は、なんと言ってもアルトのアリア(第4曲)でしょう。《ロ短調ミサ》中に「アニユス・デイ」として蘇ったことは既に触れたとおり(原曲は、ある結婚セレナータ)。後半は白い衣の天使の二重唱から再開します。ここはチラシの挿画(ジョットのフレスコ画。月報 No. 724 にも紹介)の場面です。主の再臨を告げる天使の慰めを得て、弟子たちは〈喜びに満ちて〉山を降りてきました。

冒頭と終曲をトランペット3本とティンパニをふくむ豪華な編成の大合唱で包み、主要曲の位置に世俗祝賀音楽からの転用を配置(第1、4、6曲)するなど、光の季節にふさわしい、喜びの大爆発です。

◆上演用歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。  
[http://bachchor-tokyo.jp/japanese\\_words/index.htm](http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm)

## 変奏曲は変奏してこそ

安曇野閑人 大野 博人

社会は変奏曲のようだ。

バッハのゴールドベルク変奏曲は、美しいアリアが、着飾ったり、悲愁の色を帯びたり、疾駆したり、千変万化する。まったく違う曲になっていくようでいながら、いつも最初の旋律がどこからか聞こえてくる。

社会も、もとの姿を残しながら日々変わっていく。

先日、この国の首相が、同性婚について問われて「社会が変わってしまう」と答えた。

何を言っているんだろう？ 変わらない社会なんてあるのだろうか。歴史学者や人類学者でなくとも、人間の社会がつねに変化し、その文化やライフスタイルもたえず変容し続けていることはだれでも知っている。その変化に寄り添い、ちゃんとした変奏曲を紡ぎだしていくのが政治の仕事だ。

そもそも「イノベーション」だとか「変革」だとか、選挙のたびに喧伝しているのは政治家である。首相本人も、1月の通常国会冒頭の施政方針演説で「これまでの時代の常識を捨て去り、強い覚悟と時代を見通すビジョンをもって、新たな時代にふさわしい、社会、経済、国際秩序を創り上げていかねばなりません」とぶち上げていた。

変えたいのか変えたくないのか。言葉がテキトーである。

先日、長野市の集まりで移民をテーマに話をする機会があった。欧州で取材したことが中心だったのだけれど、日本についても付け加えようとデータを確認していて、今さらながら気が滅入った。

人口減少と少子高齢化という人口動態の危機で、日本社会は崖っぷちに立っている。

国民の年齢の中央値という指標がある。国民全員を年齢順に並べたときにちょうど真ん中にいる人の年齢を指す。いわば社会の年齢だ。

今の日本は50歳。つまり全国民の半分は50歳以上ということになる。今まではどうだったか。

敗戦直後から高度経済成長期にかけて20代が続く。1964年の東京五輪の時も、1970年の大阪万博の時も日本は20代だった。バブル経済に浮かれたのは30代。40代に入るのは、21世紀になるころだ。そして今、50歳を超えたけれど、老いはまだ当分、止まりそうにない。

人口動態の予測はひじょうに正確である。手を打たなければ、日本がいずれ危機に直面することは何十年も前からわかっていた。そして、その通りに事態は進行した。子供を安心して育てられる環境を整備して、出生率を上げる政策も打ち出さず、移民の受け入れもずっと及び腰。

「日本の指導者たちはバカなのか。なんで明らかになっている問題をずっと放置していたのか」とあきれたフランスの知識人がいた。おっしゃるとおり。

「社会は変わってしまう」どころか、すっかり変わっているのだ。老いさらばえた。

15年ほど前、少子高齢化への危機感から日本を移民国家に、と提言した政治家たちがいた。50年で1000万人の移民を受け入れようと呼びかけた。1年に20万人というペースだ。大胆で野心的に見えた。

提言を出したのは自民党の国会議員80人である。だが、保守層の反対で、あっという間につぶれた。「社会が変わってしまう」ことをいやがったようだ。

だが今、日本に定住を始める外国人の増加は、年間20万人ほどになっている。移民と呼ばれてはいないけれど。

あの提言は野心的でも大胆でもなく、現実的だったにすぎない。反対したグループは「社会が変わってしまう」のを阻止したつもりかもしれないけれど、「社会は変わってしまう」のだ。政治が見て見ぬふりをしたままだから、入ってくる人にも受け入れる人にも苦勞を押しつけながら。

思い出しておきたい。日本は明治時代から1990年代まで同胞を移民として送り出し続けた。そのとき、日本政府は、移民していく人たちに「家族とともに受け入れ国にわたり、その国の発展に貢献せよ」と呼びかけていた。そう言っていた国の政府が今、やってくる外国人には家族は連れてきてほしくないと言う。破廉恥である。

変奏曲をちゃんと変奏できない演奏家は舞台から去ってほしい。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■大正時代に、日本からの移民を促進する国策会社が作ったポスター。移民は家族で、と呼びかけている(写真提供と説明:筆者)

### 【編集後記】

当連載、「ついに3年目に突入しました」と安曇野閑人氏の送稿メールにありました。ロシアのウクライナ侵攻が2年目、コロナ騒ぎは4年目、鬱陶しい日々をお付き合いくださっています。ただただ感謝申し上げます(K)